

親子ちゃれんじ② むしむしキャンプ～おやこでむしとりピクニック～

- 趣 旨**：地域の子育て支援として、幼児に関わる保護者の緩やかなコミュニティを創る。
親子で夢中になる機会を通して、お互いに楽しむ時間の大切さを感じる。
- 日 時**：日帰りで2日間開催
令和2年9月20日（日） 11:00～18:30
9月21日（月・祝）11:00～18:30
- 場 所**：国立淡路青少年交流の家
- 対 象**：子どもとその保護者 1日15組、50名程度
- 参加者**：9月20日 15家族53名（保護者24名、子ども29名）
9月21日 14家族43名（保護者19名、子ども24名）
2日間 計29家族96名（保護者43名、子ども53名）
- 講 師**：NPO法人子どもとむしの会 吉岡朋子氏 他6名



7 プログラムの内容

9月20日(日)・9月21日(月・祝) 11:30 おやこでむしとり

開会式で事業内容の説明やスタッフの紹介などを終えた後、講師の先生方より、虫とり網を使い実演しながら虫のとり方のレクチャーを受けた。バッタなどの草むらに潜む虫や、トンボなどの空を飛ぶ虫など、虫の種類によって虫とり網の使い方が違うことや、バッタが上に跳ねるといった性質を生かしながら上手に虫とりをする方法を教わった。

レクチャーが終わると、親子で虫かごや虫とり網を携え、草むらや吹上浜など捕まえた虫たちがいると思われる場所へ向かっていった。最初は虫を捕まえても触れることが出来ず、「むりー！」と叫んでいた女の子が段々と慣れて、最後には虫を手で捕まえて自分でチャック袋に入れられるようになっていった。

その他にも、最初は家族単位で虫とりを行っていたが、時間が経つにつれて「ギンヤンマがあっちに行った!」「捕まえられてすごい!!」など子ども同士が声掛けを行いながら、共に虫とりをする様子が見られた。

浜で見つけたアリジゴクも「ウスバカゲロウのアリジゴクだよ」と講師の先生方から詳しい名前や特徴を教えてもらっていた。自分で捕まえた虫だからこそ、興味を持ち、大事に思えるのはもちろんのこと、触り方や生態などを知り、一層想いが増したようだった。



9月20日(日)・9月21日(月・祝) 15:30 むしのおえかき

虫捕りを終えた後、野外炊飯場で「むしのおえかき」を行った。自分たちが捕まえた虫の中から気に入った虫を選び、よく観察し、画用紙に描いた。

子ども達が真剣に虫と向き合い、「体は何色をしているのか、脚はどこから生えているのか、羽はどんな模様をしているのか」など、じっくりと観察しながら絵を完成させていった。



9月20日(日)・9月21日(月・祝) 16:30 閉会式・むしむしマップづくり

閉会式では、むしのおえかきで描いた絵をシールにしたものを、交流の家のマップに貼った。描いた絵の説明と、その虫をマップ上のどこで見つけたかを発表し、むしむしマップへシールの貼り付けを行った。

最終的には、まささらだったマップをみんなで描いたむしの絵でいっぱいになり、マップを完成させることが出来た。発表の際には、描いた絵に対して講師の先生からのコメントも頂いた。



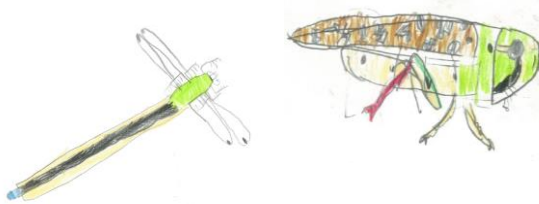
8 参加者の声

- 講師の豊かな知識に子どもの興味も深まった。まず体験するのが良かった。
- 一生懸命に虫を捕まえている姿を見て、子どもの虫に対する気持ちが変わったように思った。
- 虫取りと同時に先生に虫の事を教えてもらえた。虫の専門家の先生たちと話すのが楽しかった。

今回の事業で確認した虫の種類

確認された昆虫・・・・・・・・・・59種

確認された全ての生き物・・・・428匹



9 所感

新型コロナウイルス対策のため、例年、宿泊で行っていた「むしむしキャンプ」を日帰りで2日間行った。講師の先生方には、屋外での活動ができなかった時に備えて多くの虫を持参いただいたが、幸いにも雨は降らず、屋外で虫とりや虫の観察ができた。

事業全体としては、「虫とり」と「むしのおえかき」を通して、親子が夢中になる機会を作り出すことができた。また、「むしむしマップづくり」では、参加者全員で協力し、1つのマップを作り上げたことが子ども達の達成感に繋がった。

親子で夢中になる機会を多くつくり出せたことで、保護者が子どもの生き生きとしている様子を見ることが出来たという声があった。また、親子共に虫が苦手だったが、参加してみると意外と虫とりを楽しめたという参加者もいた。このように、親子で何かに挑戦することによって、新たな一面に気付いていただけたことは大きな成果と考える。

参加者同士で、「久しぶりです。また会いましたね。」「次の親子ちゃれんじはどうしますか。」などと会話している姿もあり、家族間のコミュニティが広がっていることを感じた。引き続き親子ちゃれんじを実施し、さらにコミュニティを広げられればと考える。